

令和6年度島根県立大学短期大学部
学校推薦型・総合型選抜 社会人・学士 帰国生 私費外国人留学生特別選抜
保育学科 小論文問題

【問題】

次の文章は、「声の力」について述べられたものである。この文章を踏まえて、将来保育者を目指すあなたの視点から「声の力」について考えたことを、ふさわしい題名をつけて、具体的に800字以内で論述せよ。

聞いた話だが、胎児は四カ月のころから、もう耳が聞こえているのだそうだ。外界の音は聞こえないとしても、母親の心音や血液の流れる音などは聞こえるのだろう。もしかすると、母親の話し声もちろん意味は分からぬとしても、そこにこめられた感情によって胎児になんらかの影響を与えているのではないだろうか。また臨死体験者によると、聴覚は最後の最後まで残っているものらしく、身内の人々が耳元で大声で自分の名を呼んだりするのが、わずらわしかったという話もどこかで読んだことがある。

たとえば小鳥のさえずりや犬の遠吠え、鯨が海中であげる、歌ではないかと言われるゆったりした抑揚を伴った鳴き声などにも、私たち人間は感応する。そこに意味だけではとらえきれない生き物の声のもつ力を感じる。ヒトの言葉も文字となる前は声だった。私たちは言葉を文字としてではなくまず音として、声として、耳と口を通して覚える。母親は生れた瞬間から赤ん坊^{なんご}をあやす。その声は意味を伝えようとする言葉ではなく、愛情を伴ったスキンシップとしての喃語だ。声は触覚的だ。声になった言葉は脳と同時にからだ全体に働きかける。

ロシアかどこかの名優が舞台上で背を向けて食事のメニューを読み、観客を泣かせたという話を聞いたことがある。文字を覚え、本を黙読する私たちはともすると声に出された言葉にひそむ意味を超えた力を見落とす。詩・韻文は現代では声を失いかけているが、それを補うかのように歌が巨大な市場を形成していることもまた、声のもつ不思議な力の存在の証しと言えよう。その力を感じ取る能力を私たちは胎児のころからつちかっているのだ。わらべうたも昔語りも声にそのみなもとをもち、それは意識と同時にもっと深く私たちの意識下に働きかける。子どものころも、おとなになった今も。

私のアメリカの友人で、いわゆるストーリーテリングをしている男がいる。彼によると本を読む「読み聞かせ」よりも、自分のからだ^{からだ}が覚えた話の「語り聞かせ」のほうがはるかに聴衆をとらえるそうだ。文字の発明は言葉に大きな力を与えたが、それが言葉からある種呪術的と言っていい力を奪った一面もあることを忘れてたくない。母親たちが眠りにつこうとする子どものかたわらで、絵本などの読み聞かせをするのはいいことだが、その声に義務感のようなものがまじっていたら、子どもは敏感にそれに気づくだろう。子どもを育てていく上で、命令や管理の声をなくすことは不可能だが、同時に声は愛撫のひとつのかたちだとい

うことも、親は自覚していていいと思う。愛のこめられた声によって言葉を知り、言葉を覚えていくことが出来るのは幸せなことだ。その幸せに恵まれない子どもたちも、この世にはたくさんいるのだから。

出典：谷川俊太郎ほか 『声の力』 岩波書店、2002年（一部改変）